

性的マイノリティの自己受容とカミングアウトの関連性の検討

田中 みどり・今城 周造

The relationship between self-acceptance of sexual minorities and coming out

Midori TANAKA and Shuzo IMAJO

This study examined the influence of self-acceptance on coming out by individuals of sexual minorities. In the preliminary study, we interviewed individuals of sexual minorities ($N=8$) and developed the Coming Out Scale comprised of 27-items. We also translated the Lesbian, Gay, Bisexual Identity Scale (LGBIS-SWU; Mohr et al., 2011) into Japanese. The main study participants were individuals of sexual minorities ($N=106$), who responded to the Coming Out Scale and the LGBIS-SWU. A factor analysis of LGBIS-SWU extracted four factors: "Identity centrality," "Difficult Process," "Internalized Homonegativity," and "Identity Uncertainly." Multiple regression analysis revealed that coming out behavior was positively associated with Identity Centrality but negatively associated with Internalized Homonegativity.

Key words : Sexual minority (性的マイノリティ), Identity development (アイデンティティの発達),
Coming out (カミングアウト), Self-acceptance (自己受容),
LGBIS (The Lesbian, Gay, and Bisexual Identity scale) (LGB アイデンティティ尺度)

問題

はじめに 近年、性的マイノリティについての関心が高まってきており、心理学の分野においても、国内外で多くの研究がされるようになってきた。小学校や中学校、そして高等学校でも、「性の多様性」についての授業が、少しずつではあるが、実施されてきている。しかし、日本の学校現場においては、依然として異性愛を中心とした教育が根強くなされている。その結果、性的マイノリティの子どもは、学校現場でいじめにあたり不登校になったり、また、教師にも理解されないことが多く、さらに、自殺念慮がきわめて高く、自尊感情も低いといわれている(伊藤・加藤・堀江・東・湯川・松並, 2018)。

セクシュアリティの定義 Sexualityは、「性的なこと」であり、幅広く曖昧な概念である。セクシュアリティの主な構成要素としては、以下の3つがあげられる。第一に、身体的性別である。英語ではsexといい、身体的な男女の性別を指す。

第二に、心理的性別／性同一性である。これはgender identityとも言われ、自分自身の性別をどう認識しているかという心理的な自己の性別認知である。「自分は男である」「自分は女性である」「自分は男性でも女性でもない」などの性別認知がある。第三に、性的指向(sexual orientation)は、恋愛や性愛の対象となる性別が何かを指す。異性愛、同性愛、両性愛、無性愛(男女いずれにも魅力を感じない)がある(針間, 2014)。

薬師・笹原・古堂・小川(2014)によると、上記3つのセクシュアリティの構成要素は、分かりやすく〈からだの性〉〈こころの性〉〈好きになる性〉と表すことができ、教育現場での心理教育ではこの表現が主に使われることが多い。

次に、LGBTとは、レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダーの4つの頭文字である。直接には、この4つのセクシュアリティ(=性のあり方)を一括して表す言葉であるが、広い意味では、マイノリティ(少数派)の対語であるマジョリティ(多数派)以外のすべての性的

マイノリティを包括して表す言葉でもある。国内人口の5.2%、約20人に1人がLGBTと報告されている。学校であれば、40人のクラスに2人はLGBTの子どもがいることになる(薬師ら, 2014)。

自身の性自認と好きになる性別が同じ場合には同性愛、異なる場合には異性愛という。レズビアン(女性同性愛者)は、性自認が女性で、性的指向が女性の人を指し、ゲイ(男性同性愛者)は、性自認が男性で、性的指向が男性の人を指す。また、バイセクシュアル(両性愛者)は、性的指向が異性の場合も同性の場合もある人を指す。また、トランスジェンダーは、身体的性別と性自認が一致しないという感覚を持っている人のことを指す。これらのセクシュアリティの他にも、Xジェンダー(性自認を男性・女性のいずれかとは認識していない状態)などがあり、様々なセクシュアリティのカテゴリが存在する。

性的マイノリティのメンタルヘルス 平田(2014)によると、レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル(LGB)のメンタルヘルスに関して、欧米では多くの疫学的研究が行われており、LGBのメンタルヘルスはLGB以外の集団と比べて低いことが明らかになっている。気分障害、不安障害、アルコール依存や薬物依存、自殺念慮、自殺企図の割合が、LGBにおいては、より高い。

Booker, Riegger, & Unger (2017) は、性的指向による健康格差を調査した研究で、健康状態は、ヘテロセクシュアル(恋愛や性愛の対象が異性に向く人)で最も良く、バイセクシュアル(恋愛や性愛の対象が異性の場合も、同性の場合もある人)で最も悪いことを報告している。また、ゲイとレズビアンでは、ヘテロセクシュアルに比べて特に精神機能、心理的苦痛などの面で、健康状態が悪かった。

日本の研究では、日高(2008)のインターネット調査により、10代のゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスが、最も損なわれていることが示唆された。また、ゲイ・バイセクシュアル男性の自殺未遂のリスクは異性愛男性の約6倍である(日高・木村・市川, 2007)。性同一性障害者においては、典型的な性役割とは異なる行動をとることや、同性愛への性志向をもつことによるいじめ、社会や家族からの孤立感、思春期に日々変化していく身体への違和などを要因として、自殺

念慮を抱いたり、自殺未遂を行ったりすることがある。

このように、性的マイノリティのメンタルヘルスは、性的マジョリティに比べて低く、デリケートでもある。その原因は多様であるが、その中でも、本当の自分、ありのままの自分を周囲に打ち明けられないストレスは大きいと考えられる。本研究では、性自認・性的指向性のカミングアウトに注目した。

カミングアウト カミングアウトとは、自身のセクシュアリティを誰かに伝えることである。カミングアウトは、性的マイノリティについて語る時に欠かせないほど、当事者と密接にかかわっているテーマである。

石丸(2004)によれば、普段の生活では自分が同(両)性愛者であることを特に明らかにしていないことが多く、家族など重要な他者に対しては完全に隠していることも多い。加えて、自分のセクシュアリティが家族や友人など重要な他者から受け容れられるかどうかは、同(両)性愛者にとってとりわけ大きな意味を持つてくることを指摘している。

またMeyer(2003)によれば、性的マイノリティが、対人関係や治療上の関係における告白や暴露を通して、感情を表現したり、他者と自分の重要な側面を共有したりすることが明らかになっている。

このように、カミングアウトのメリットや重要性の指摘がある一方で、そのデメリットも挙げられている。例として挙げれば、親が保守的で、著しく否定的な反応を示したり、言葉で罵倒をしてきたりするために、当事者は自分のセクシュアリティを打ち明けたがらないなどがある。これについてTamagawa(2018)は、日本において、カミングアウトは、その人の性的アイデンティティをはっきり述べるというよりは、秘密の公表としてとらえられていることを指摘している。すなわちカミングアウトには、ただ単に自分の属性を相手に説明するという意味だけではなく、話してはならないこと、隠したほうが良いとされていることを“confession(罪の自白、ざんげ)”するという含意がある。

アイデンティティの発達とカミングアウト カミングアウトは、差別や偏見などの外的な環境要

因によって左右されうるが、一方で、カミングアウトを性的なアイデンティティの発達と関連づけるモデルもある。

Cass (1979, 1984) は、ゲイ・レズビアンアイデンティティ形成のプロセスとして6段階モデルを提唱した。Stage 1は〈アイデンティティの混乱〉、Stage 2は〈アイデンティティの比較検討〉、Stage 3は〈アイデンティティの許容〉、Stage 4は〈アイデンティティの受容〉、Stage 5は〈アイデンティティへの自信(思い入れ)〉、Stage 6は〈アイデンティティの統合〉である。

Troiden (1979, 1989) のモデルは、性的なアイデンティティに気づく前から始まっていることが特徴である。Stage 1は〈鋭敏化〉、Stage 2は〈アイデンティティの混乱期〉、Stage 3は〈アイデンティティの受容〉、Stage 4は〈コミットメント〉である。〈コミットメント〉の段階は、Cassのモデルの第5段階と第6段階に対応しており、強固な自己アイデンティティとしての同性愛アイデンティティを知覚し、同性愛者として生きることに非常に満足している時期とされている。

性的マイノリティのアイデンティティを測定する尺度としては、Mohr & Kendra (2011) のLGBIS (The Lesbian, Gay, and Bisexual Identity Scale) が開発されている。この尺度は、Mohr & Fassinger (2000) が開発したLesbian & Gay Identity Scaleを修正・拡張したものである。この修正版は、より包括的で、当事者を不快で傷つける言葉が少ないことが特徴となっている。

このように先行研究では、性的マイノリティのアイデンティティ発達の最終段階は、性自認が自己に統合され、自己受容されている状態である。

自己受容 Rogers (1967) は、自分自身をありのままに見ようとしていること、自分自身を“現実的に (realistically)” 受容しようとしていること、自分の良い面と同じように悪い面をも見、かつ受容しようとしていることを自己受容性と呼んでいる。また今林 (1992) は、青年が真に人間的に成熟していくためには、他者から了解されることを切望するあまり、自分の実力以上に膨張している見せかけの自己を委縮させ、等身大の自己像に近づけていく努力が必要であり、自己をありのままに眺め、受容することでより生産的な自己実現を獲得できると指摘している。〈他者から了解

されることを切望するあまり、自分の実力以上に膨張している見せかけの自己を委縮させ) という部分は、Cass (1989, 1984) のモデルの第1段階目や、Troidenのモデルの第3段階目にみられる、“マイノリティであることを受け容れられず、マジョリティとして生まれたかったと考える。マジョリティとして行動する”という部分と符合する。また、Rogers (1967) は、自己の標準が、他者の態度や希望に基づくものではなく、自分自身の経験に基づくものであるとみるようになることを自己受容と定義づけてもいる。この〈他者の態度や希望に基づく〉は、性的マイノリティにおける“同性愛者が異性愛者のふりをする”“異性愛主義や性的マジョリティの価値観に迎合する”という点と符合する。またRogers (1967) は自己受容を、「自分自身を、非難すべきものとしてではなく、価値のある、尊敬に値する人間であるとみるようになる」としている。

カミングアウトは必ずしもしなければならないというものではないが、内面において、“自己受容”がされていないばかりに、「性的マイノリティの自分(無自覚な場合もある)」を他者に打ち明けられていないのだとしたら、それはその人にとって不適応であり、大変辛い状態なのではないだろうか。

しかしながら、日本では、カミングアウトをした場合の相手の反応についてなど、カミングアウトと当事者を取り巻く環境に関連した研究はされているが、カミングアウトする際の性的マイノリティの内面に注目した研究はほとんど行われていない。

目的 本研究では、性的マイノリティとしてのアイデンティティの発達がカミングアウトに及ぼす影響を検討する。性的マイノリティとしての自己受容が、カミングアウトを促進すると考えられる。

また従来は、カミングアウトの遂行が研究されてきた。しかし、カミングアウトできてもあえてしない場合や、今はしていないがこれからするつもりである／するかもしれないという場合もあると推測される。本研究では、カミングアウトをその遂行能力、行動意図、実際の遂行に分け、カミングアウトの段階と、カミングアウトへの態度や性的マイノリティとしてのアイデンティティとの関連についても検討する。

本研究のリサーチクエストは以下の2つであった。

リサーチクエスト1：自己受容とカミングアウトにはどのような関連があるのか。

リサーチクエスト2：カミングアウトの遂行能力、行動意図、遂行は、それぞれ性的アイデンティティの発達段階とどのように関連しているのか。

本研究の仮説は以下の通りであった。

仮説1：自身が性的マイノリティであることについての自己受容がされているほど、カミングアウトを積極的に行うだろう。

仮説2：同(両)性愛についてのアイデンティティの発達が完了している人は、カミングアウトを遂行するだろう。また、同(両)性愛についてのアイデンティティの発達が途中である人は、カミングアウトの行動意図が高いだろう。

方 法

対象者 対象者は、性的マイノリティ当事者108名であった。フェイスシートでシスジェンダー(からだの性とところの性が一致している人)・ヘテロセクシュアルと回答した2名を除き、106名を分析対象とした。このうちレズビアン・ゲイ・バイセクシュアルの対象者は66名であった。

倫理的配慮 調査は匿名であり、また調査への協力は任意であった。

手続き 性的マイノリティの当事者サークルに郵送で配布する方法と、当事者である知人に直接配布する方法の二つにより、質問紙調査を行った。

フェイスシート 年齢に加えて、性的指向・性自認の項目を設定した。性的指向の質問では、1.レズビアン、2.ゲイ、3.バイセクシュアル、4.パンセクシュアル(全てのセクシュアリティの人が恋愛や性愛の対象となる人)、5.ポリセクシュアル(複数のセクシュアリティの人が恋愛や性の対象となる人)、6.アセクシュアル(どのセクシュアリティの人も恋愛や性愛の対象とならない人)、7.その他、8.分からない、9.決めたくない、10.回答しない、の中から、当てはまるものを選んでもらった。性自認の質問では、1.シスジェンダー、2.トランスジェンダー、3.Xジェンダー、4.その他、5.分からない、6.決めたくない、

7.回答しない、の中から当てはまるものを選んでもらった。どちらも、「その他」を選んだ人には、自由記述で自身のセクシュアリティを書いてもらった。以下のグラフは、フェイスシートから得られた、調査対象者の属性の内訳を示したものである。

カミングアウト尺度 予備面接調査(n=8)から、27項目のカミングアウト尺度を作成した。この尺度は、カミングアウトを「している」9項目・カミングアウトが「できる」9項目・カミングアウトを「するつもりだ」9項目の3種類に分かれている。カミングアウトする相手として、①父親、②母親、③兄弟姉妹、④バイト(仕事先)の同僚、⑤バイト先の上司、⑥高校の友達(親友)、⑦高校の友達(そこまで親しくない)、⑧大学の友達(親友)、⑨大学の友達(そこまで親しくない)の9種類の対象を設定した。どの相手

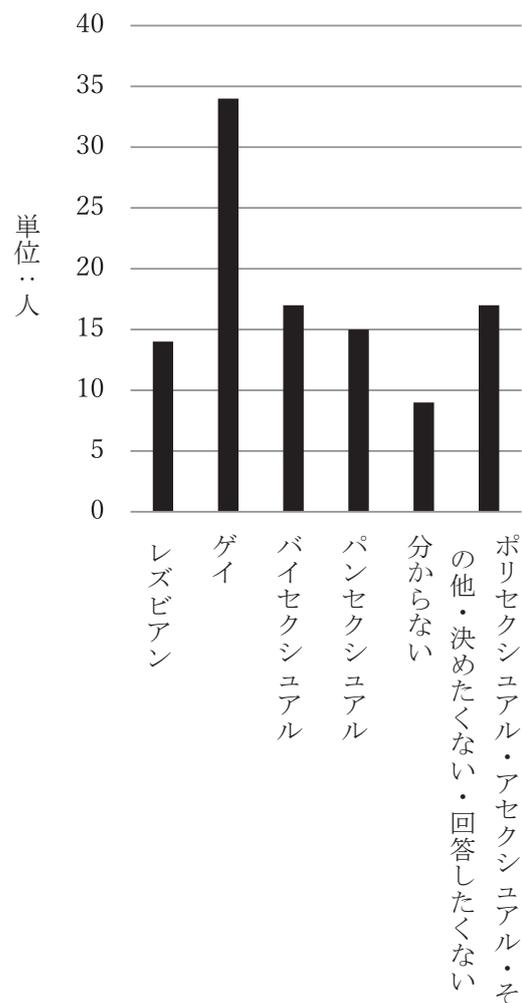
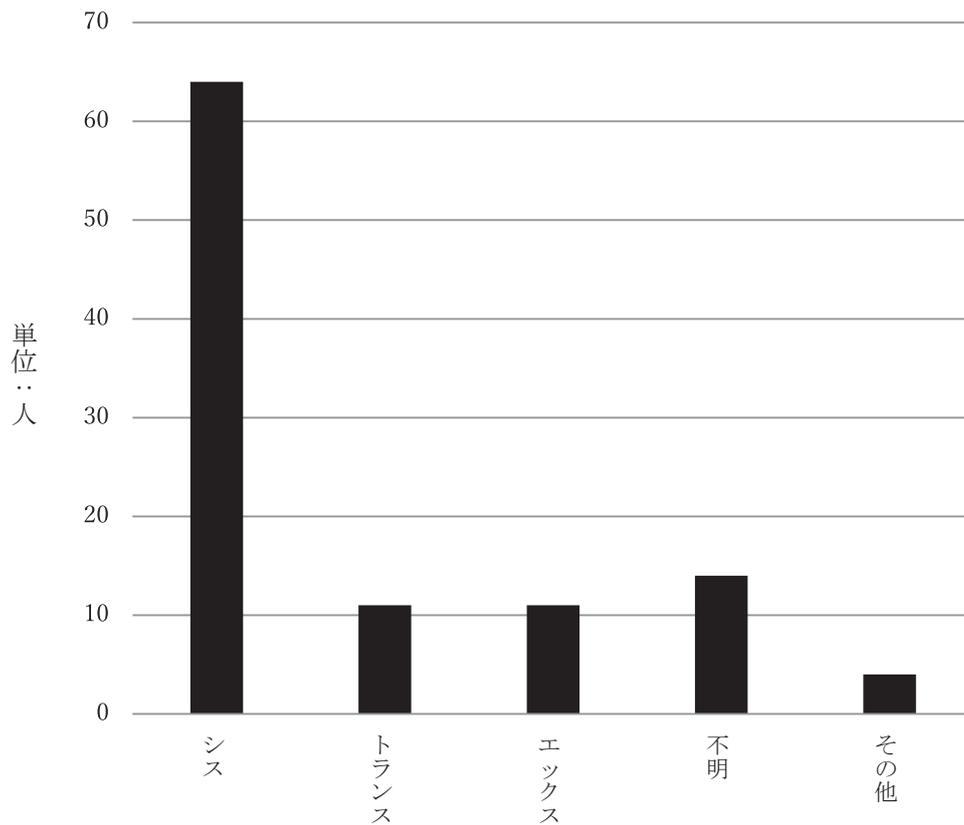


Figure 1 調査対象者の性的指向の分布



シス：シスジェンダー トランス：トランスジェンダー エックス：Xジェンダー
 不明：わからない その他：その他決めたくない・回答しない

Figure 2 調査対象者の性自認の分布

にどの程度カミングアウトできるかを、SD法形式で「まったく (-3)」から「完全に (+3)」までの7段階で評定してもらった。

カミングアウトへの態度尺度 同じくカミングアウトへの予備調査 ($n=8$) から、17項目のカミングアウトへの態度尺度を作成した。評定尺度は、「まったくあてはまらない (1) - 非常にあてはまる (5)」の5件法を用いた。

人生満足度尺度 Diener, Emmons, Larsen, & Griffin (1985) の人生満足度尺度 (the Satisfaction With Life Scale) は5項目から構成され、7件法での回答を求めている。SWLSは、角野 (1994) により日本語に翻訳されている。本研究ではこの日本語版を用い、5件法で回答を求めた。

多次元アイデンティティ発達尺度 (DIDS) Luyckxら (2008) によって開発された多次元アイデンティティ発達尺度を、中間・杉村・畑野・溝上・都筑 (2014) が翻訳した多次元アイデンティ

ティ発達尺度日本語版 (以下DIDS-J) を用いた (項目例：「自分の人生をどうするのかについては、自分で選んで決めた」「自分がすでに決めた人生の目的が本当に自分に合うのかどうか、考える」)。質問は17項目で、評定は上記と同じ5件法であった。

昭和女子大学版Lesbian, Gay, and Bisexual Identity Scale (LGBIS-SWU) 改訂版Lesbian, Gay, and Bisexual Identity Scale (LGBIS; Mohr & Kendra, 2011) を日本語に翻訳し、業者 (翻訳ユレイタス) に依頼してネイティブスピーカーによるバックトランスレーションを行った。その結果を受けて表現を微調整し、LGBIS-SWU (昭和女子大学版LGBIS) とした。質問は27項目である。元の尺度は7件法であったが、本研究では5件法に変更した。シスジェンダーのレズビアン・ゲイ・バイセクシュアルの当事者に限定して回答を依頼した。

結果

カミングアウトへの態度尺度の因子構造 カミングアウトへの態度尺度について、探索的因子分析を行った。スクリープロットから、2因子構造が妥当であると考えられたため、2因子を指定して最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。十分な因子負荷量を示さなかった5項目を除外したところ、12項目が残った (Table 1)。

第1因子は、「自分のセクシュアリティを話すことで、より人と仲良くなれると思う。」「自分のセクシュアリティを人に話すことで、コミュニケーションが活発になると思う。」など、セクシュアリティを人に打ち明けることでより親密な人間関係を築くことができるであろうという希望や期待といった内容の項目が、高い負荷量を示していたことから、「人間関係親密希望」因子と命名した。第2因子は、「自分のセクシュアリティを話すことで、いままで築き上げてきた人間関係が壊れてしまうかもしれないと思う。」「自分の性自認や性的指向を打ち明けたとき、誤解を招く

のではないかと懸念する。」などのセクシュアリティを打ち明けることでこれまでの人間関係が壊れてしまうのではないかと案ずる内容の項目が、高い負荷量を示していたため、「人間関係崩壊懸念」因子と命名した。内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、「人間関係親密希望」で.80「人間関係崩壊懸念」で.68であった。

多次元アイデンティティ発達尺度の因子構造

中間ら (2014) の研究では5因子であったが、本研究ではスクリープロットから2因子構造が妥当であると考えられた。2因子を指定して最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった2項目を分析から除外し、23項目が残った (Table 2)。

第1因子は、「将来の計画のおかげで、自分というものがはっきりしている。」「自分の人生をどうするのかについては、自分で選んで決めた。」など、アイデンティティを確立している内容の項目が、高い負荷量を示していたことから、「アイデンティティ確立完了」因子と命名した。第2因子は、「自分の将来の計画が、自分の本当にのぞ

Table 1 カミングアウトへの態度尺度の探索的因子分析

項目	因子負荷量	
	I	II
I 人間関係親密希望 ($\alpha = .80$)		
5. 自分のことを、より深く相手に知ってもらいたい。	.69	.00
6. 他者が私のことを理解するためには、相手が私のセクシュアリティを知っていることがとても重要である。	.66	.18
12. 自分のセクシュアリティを話すことで、より人と仲良くなれると思う。	.65	-.14
9. 関わる人にはありのままの自分を見て欲しい。	.64	-.01
15. 自分のセクシュアリティを人に話すことで、コミュニケーションが活発になると思う。	.58	-.16
13. 自分のセクシュアリティを当事者ではない人に正しく知ってほしい。	.54	.12
*8. 自分が性的マイノリティであることは特に人に話す必要はない。	.49	.10
II 人間関係崩壊不安 ($\alpha = .68$)		
3. 自分のセクシュアリティを話すことで、いままで築き上げてきた人間関係が壊れてしまうかもしれないと思う。	-.03	.71
2. 自分のセクシュアリティを打ち明けると相手に負担がかかると感じる。	-.16	.57
4. 自分のセクシュアリティが周囲に広まるのを恐れる。	.07	.54
11. 性的マイノリティに対する社会の偏見が強いと感じる。	.10	.50
16. 自分の性自認や性的指向を打ち明けたとき、誤解を招くのではないかと懸念する。	.08	.44

因子間相関 I II
— -.01

*は逆転項目

Table 2 多次元アイデンティティ発達尺度 (DIDS) についての探索的因子分析

項目	因子負荷量	
	I	II
I アイデンティティ確立完了 ($\alpha = .91$)		
19. 自分の進みたい人生が分かっている。	.79	-.04
18. 将来の計画のおかげで、自分というものがはっきりしている。	.77	.18
2. 私の将来の計画は、自分の本当の興味や大切だと思うものに合っている。	.76	-.02
25. 自分が将来なにをするのかについての計画がある。	.72	.22
20. 自分が将来なにをやっていくのか、思い浮かべることができる。	.71	-.13
*5. 人生で本当にやりとげたいことは何か、はっきりしない。	.70	-.13
11. 将来の計画があるから、私は自信を持っている。	.66	-.01
21. 自分の進みたい人生は、自分に本当に合うものになると思う。	.65	-.06
1. 自分がどんな人生を進むか、決めた。	.61	-.12
9. 私の将来の計画は、自分にとって正しいものに違いない。	.60	-.02
13. 自分がすでに決めた将来の計画について考える。	.53	.35
10. 自分の人生をどうするのかについては、自分で選んで決めた。	.45	-.05
3. 自分が進もうとする人生には、どのようなものがあるのか、すすんで考える。	.44	.40
II アイデンティティ確立途中 ($\alpha = .79$)		
16. 自分の将来の計画が、自分の本当にのぞんでいるものかどうかを考える。	-.21	.86
6. どんな人生を進みたいのか、どうしても考えてしまう。	-.26	.77
15. どんな人生を進まなければならないのか、考え続けている。	-.11	.74
24. 自分が進みたい人生を、ずっと探し続けている。	-.18	.67
17. 自分にとってよいと思える色々な生き方について考えている。	.07	.59
22. 自分に合ういろんな生き方を考えている。	.19	.55
4. 自分がすでに決めた人生の目的が本当に自分に合うかどうか、考えている。	.29	.55
8. 私の人生の計画は、自分にとって正しいものに違いない。	.25	.52
*14. 自分が将来をどうしたいのか、気がかりだ。	.49	-.51
12. 自分が将来するかもしれない色々なことについて考える。	.16	.49
	因子間相関	I II
		— .27

*は逆転項目

んでいるものかどうかを考える。」「自分が進みたい人生を、ずっと探し続けている。」など、将来について、自分について、考え悩んでいる途中という内容の項目が、高い負荷量を示していたことから、「アイデンティティ確立途中」因子と命名した。 α 係数を算出したところ、「アイデンティティ確立完了」で.91、「アイデンティティ確立途中」で.79であった。

昭和女子大学版Lesbian, Gay, and Bisexual Identity Scale (LGBIS-SWU) の因子構造 Mohrら (2011) のLGBISを日本語に翻訳し日本で実施した場合の因子構造を明らかにするため

に、LGBIS-SWUの探索的因子分析を行った。Mohrら (2011) では8因子構造であったが、本研究ではスクリープロットから、4因子が妥当であると考えられた。4因子を指定して、重みづけのない最小二乗法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった4項目を分析から外し、20項目が残った (Table 3)。

第1因子は、「自分がLGBであることは、私の人生の重要な一部であると思う。」「私の性的指向は、自分のアイデンティティの中心部分である。」など、自分がLGBであることをアイデンティティ

Table 3 LGBIS-SWUについての探索的因子分析

項目	因子負荷量			
	I	II	III	IV
I アイデンティティの中心性 ($\alpha = .86$)				
25. 自分がLGBであることは、私の人生の重要な一部であると思う。	.96	-.11	-.04	.04
24. LGBの人間であることは、私の人生のとても重要な側面である。	.92	-.20	.03	-.02
21. 一人の人間として私が誰であるかを理解するためには、人は私がLGBであることを知らなければならない。	.76	-.00	.07	.02
15. 私の性的指向は、自分のアイデンティティの中心部分である。	.70	.15	-.17	.12
16. 私の性的指向が、人々が私をどう見るかにどう影響するのかについてたくさん考える。	.44	.20	.27	-.10
II 困難なプロセス ($\alpha = .72$)				
12. 私がLGBの人間であると自分自身で認めることは、とても苦痛な過程であった。	-.08	.87	.03	.05
17. LGBの人間であると自分自身で認めることは、とても時間がかかる過程であった。	.05	.69	-.12	-.05
27. 自分が同性の人々に魅力を感じてしまうことは理不尽だと思う。	.22	.52	.16	.06
1. 同性との自分の恋愛関係はどちらかといえば内密にしておきたい。	-.33	.45	.24	.07
4. 同性との私の恋愛関係について誰が知っているのかを、慎重に制御している。	-.13	.36	.09	-.05
III 内在化された同性愛嫌悪 ($\alpha = .73$)				
20. 自分が異性愛者だったらよかったのと思う。	.24	.13	.70	.09
*23. ほぼ初めから自分の性的なアイデンティティを心地よく感じていた。	-.03	.13	.61	-.29
2. もしも可能なら、私は異性愛者であることを選ぶのだが…。	.09	.18	.59	.08
*6. 私はLGBの人間であることがうれしい。	-.21	-.08	.58	.15
*26. 自分がLGBであることを誇りに思う。	-.35	-.17	.54	.15
9. 私の性的指向によって他者が私を否定的に判断すると知って、心地よいと感じることはできない。	.21	-.13	.43	-.36
IV アイデンティティの不確実性 ($\alpha = .63$)				
22. 自分の性的指向について答えを出そうとするととても混乱してくる。	.09	-.07	.20	.78
8. 自分の性的指向について繰り返し考えを変える。	.03	.33	-.04	.58
3. 自分の性的指向がどのようなものなのか、完全に確信しているわけではない。	-.05	-.23	.14	.47
*10. LGBの人々が異性愛者より優れていると感じる。	.08	.09	-.19	.39

因子間相関	I	II	III	IV
I	—	.16	-.05	-.06
II		—	.26	.08
III			—	.20

*は逆転項目

の中心部分と考えている内容の項目が、高い因子負荷量を示していたので、「アイデンティティの中心性」因子と命名した。第2因子は、「私がLGBの人間であると自分自身で認めることは、とても苦痛な過程であった。」「LGBの人間であると自分自身で認めることは、とても時間がかかる過程であった。」など、LGBと認めることが難しい、または時間がかかったという内容の項目が

高い因子負荷量を示していたので、「困難なプロセス」因子と命名した。第3因子は、「自分が異性愛者だったらよかったのと思う。」「もしも可能なら、私は異性愛者であることを選ぶのだが…。」など、自分がLGBであることに後ろめたさを感じている、自分がLGBということに快く思えないという内容の項目が、高い因子負荷量を示していたので、「内在化された同性愛嫌悪」因子と命

名した。第4因子は、「自分の性的指向について答えを出そうとするととても混乱してくる。」「自分の性的指向がどのようなものなのか、完全に確信しているわけではない。」など、自分の性的指向について自分の中で明らかになっていない、はっきりしていないという内容の項目が、高い因子負荷量を示していたので、「アイデンティティの不確実性」因子と命名した。 α 係数を算出したところ、「アイデンティティの中心性」で.86、「困難なプロセス」で.72、「内在化された同性愛嫌悪」で=.73、「アイデンティティの不確実性」で.63となった。

Mohrら(2011)のLGBISは、〈受容懸念〉〈隠ぺいへの動機づけ〉〈アイデンティティの不確実性〉〈内在化された同性愛嫌悪〉〈困難なプロセス〉〈アイデンティティの優越性〉〈アイデンティティの受容〉〈アイデンティティの中心性〉の8因子であったが、本研究における因子分析では、この因子の中から〈受容懸念〉〈隠ぺいへの動機づけ〉〈アイデンティティの優越性〉〈アイデンティティの受容〉が消え4因子構造となった。今回削除した項目は、「5. 他者は私の性的指向で私を判断するのだろうか」としばしば思う。」「7. 私は異性愛者を見下している。」「11. 私の性的指向は、私が誰であるかということについて、取るに足りない要素である。」「13. 自分がLGBコミュニティの一部であることに誇りを持っている。」「14. 自分が両性愛者か同性愛者か決めかねている。」「18. LGBの人々と比べて、異性愛者の人々の人生は退屈である。」「19. 私の性的指向はとても個人的で内密

なことである。」の7項目である。

各変数間の関連 各変数間の関連について検討するために、相関係数を算出した。Table 4は各変数の平均、標準偏差と、各変数間の相関係数である。

まず、多次元アイデンティティ尺度の2因子(アイデンティティ確立完了・アイデンティティ確立途中)と、LGBISの4因子では、アイデンティティの確立完了と困難なプロセス間のみ弱い負の相関が認められた。しかし、他の因子間に相関はみられなかったため、併存的妥当性は認められなかった。

次に、カミングアウトの3段階である「遂行」「遂行能力」「行動意図」は変数間に.60以上の中程度の正の相関がみられたため、カミングアウトの3段階には関連がある。

カミングアウトの3段階とカミングアウトへの態度2因子では、「カミングアウト遂行」と「カミングアウト遂行能力」「カミングアウト行動意図」全てにおいて、「人間関係親密希望」との弱い正の相関がみられた。また、「人間関係崩壊不安」は、「カミングアウト遂行」「カミングアウト遂行可能性」と中程度の負の相関がそれぞれ認められた。

「人間関係親密希望」は、LGBIS-SWUの「アイデンティティの中心性」と強い相関が認められた。

さらに、「カミングアウト遂行」と「アイデンティティ確立完了」に弱い正の相関が、「カミン

Table 4 相関行列と平均、標準偏差

変数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	M	SD
1 カミングアウト遂行	—	.75**	.63**	.31**	-.37**	.22*	.14	.24	-.31*	-.33**	.05	.27**	-6.47	13.48
2 カミングアウト遂行能力		—	.65**	.27**	-.57**	.15	.16	.27*	-.23	-.33**	.09	.23*	-1.30	13.64
3 カミングアウト行動意図			—	.38**	-.33**	.25	.27**	.35**	-.26*	-.28*	.17	.27*	-5.80	10.72
4 人間関係親密希望				—	.03	.22*	.19	.77**	-.16	-.08	-.09	.25**	23.48	5.42
5 人間関係崩壊不安					—	-.11	.04	.06	.26*	.30*	.05	-.20*	17.81	3.62
6 アイデンティティ確立完了						—	.39**	.03	-.28*	-.00	-.24	.51**	41.05	9.99
7 アイデンティティ確立途中							—	.18	-.01	.18	.05	-.00	35.95	5.98
8 アイデンティティの中心性								—	.00	.08	.01	.06	16.61	4.68
9 困難なプロセス									—	.30*	.17	-.12	18.97	4.62
10 内在化された同性愛嫌悪										—	.13	-.05	13.74	4.22
11 アイデンティティ不確実											—	-.23	9.96	3.31
12 人生満足												—	14.13	4.60

* $p < .05$, ** $p < .01$

グアウト行動意図」と「アイデンティティ確立途中」に弱い負の相関が認められた。

最後に、カミングアウト3段階とLGBIS-SWU 4因子では、「カミングアウト遂行能力」「カミングアウト行動意図」と「アイデンティティの中心性」の間に弱い正の相関が、「カミングアウト遂行」「カミングアウト行動意図」と「困難なプロセス」の間に弱い負の相関が、「カミングアウト遂行」「カミングアウト遂行能力」「カミングアウト行動意図」と「内在化された同性愛嫌悪」の間に弱い負の相関がそれぞれ認められた。

「アイデンティティの不確実性」は、どの変数とも有意な相関は認められなかった。「人生満足」は「カミングアウト遂行」「カミングアウト遂行能力」「カミングアウト遂行意図」「人間関係親密希望」と弱い正の相関が認められ、「人間関係崩壊不安」と弱い負の相関が認められた。そして「アイデンティティ確立完了」と中程度の正の相関が認められた。

性的指向のカテゴリを独立変数、カミングアウト遂行能力を従属変数とする1要因の分散分析を行った (Figure 3)。性的指向の主効果が有意であった ($F(5, 99) = 4.37, p < .001, \eta_p^2 = .181$)。多

重比較 (Bonferroni法) を行ったところ、「ポリセクシュアル・アセクシュアル・その他・決めたくない・回答しない」は、ゲイとバイセクシュアルそれぞれと有意な差がみられた ($p < .01$)。

性自認のカテゴリを独立変数、カミングアウト遂行能力を従属変数とする1要因の分散分析を行った (Figure 4)。性自認の主効果が有意であった ($F(4, 98) = 2.87, p < .05, \eta_p^2 = .105$)。多重比較 (Bonferroni法) を行ったところ、Xジェンダーとシスジェンダーの間に有意な差がみられた ($p < .05$)。

同様に、性自認のカテゴリを独立変数、「人間関係崩壊不安」を従属変数とする1要因の分散分析を行った。性自認の主効果が有意であった ($F(4, 97) = 2.50, p < .05, \eta_p^2 = .105$)。多重比較 (Bonferroni法) を行ったところ、トランスジェンダーとXジェンダーの間に有意な差がみられた ($p < .05$)。

LGBISがカミングアウト遂行に及ぼす影響

カミングアウト遂行を目的変数、LGBISの4因子を説明変数とする重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った (Table 5 上段)。重相関係数Rは.48であり、有意であった ($F(4, 61) = 4.46, p < .01$)。

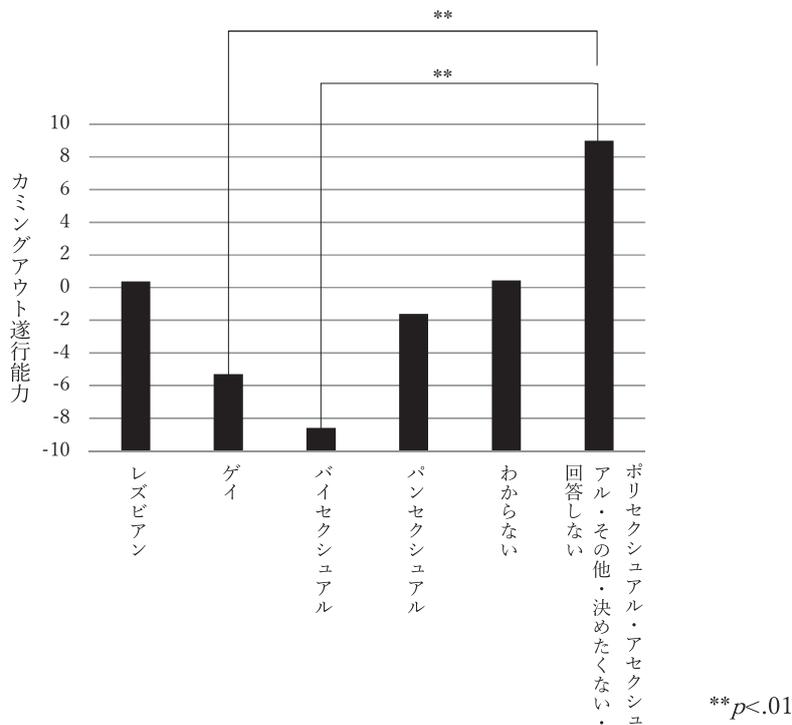
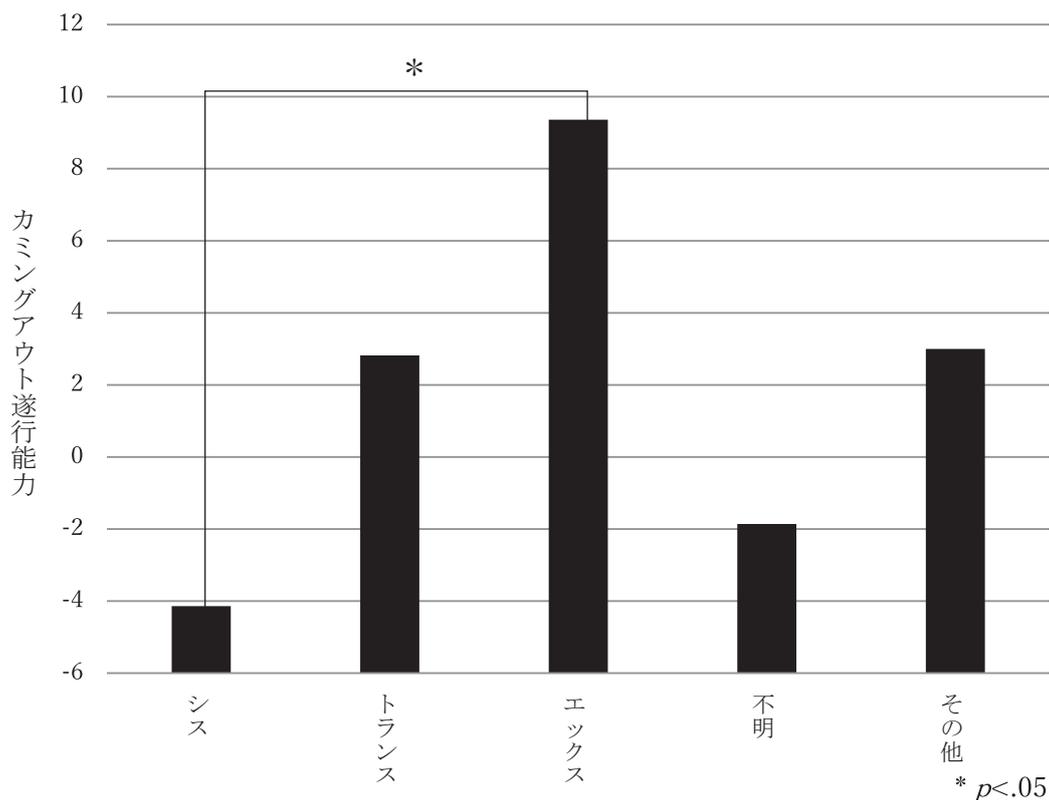


Figure 3 性的指向がカミングアウト遂行能力に及ぼす影響



シス：シスジェンダー トランス：トランスジェンダー エックス：Xジェンダー

不明：わからない その他：その他回答しない

Figure 4 性自認がカミングアウト遂行能力に及ぼす影響

Table 5 カミングアウト尺度とLGBISの重回帰分析
カミングアウト遂行

説明変数	標準偏回帰係数 β
内在化された同性愛嫌悪	-0.28*
アイデンティティの中心性	0.26*
R^2	0.23**

カミングアウト遂行能力	
説明変数	標準偏回帰係数 β
内在化された同性愛嫌悪	-0.33**
アイデンティティの中心性	0.29**
R^2	0.24***

カミングアウト遂行意図	
説明変数	標準偏回帰係数 β
内在化された同性愛嫌悪	-0.28*
アイデンティティの不確実性	0.22*
アイデンティティの中心性	0.37***
R^2	0.30***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

内在化された同性愛嫌悪とアイデンティティの中心性の標準偏回帰係数 β が有意であった。内在化された同性愛嫌悪の β は -0.28 であり、内在化された同性愛嫌悪とカミングアウト遂行には弱い負の関連がある。またアイデンティティの中心性の β は +0.26 であり、アイデンティティの中心性とカミングアウト遂行には弱い正の関連がある。

LGBISがカミングアウト遂行能力に及ぼす影響 カミングアウト遂行能力を目的変数、LGBISの4因子を説明変数とする重回帰分析(ステップワイズ法)を行った(Table 5中段)。重回帰係数 R は .49 であり、有意であった ($F(4, 63) = 5.01, p < .001$)。内在化された同性愛嫌悪とアイデンティティの中心性の標準偏回帰係数 β が有意であった。内在化された同性愛嫌悪の β は -0.33 であり、カミングアウト遂行能力と内在化された同性愛嫌悪には弱い負の関連がある。またアイデンティティの中心性の β は +0.29 であり、カミングアウト遂行能力とアイデンティティの中心性には

弱い正の関連がある。

LGBISがカミングアウト行動意図に及ぼす影響 カミングアウト行動意図を目的変数、LGBISの4因子を説明変数とする重回帰分析(ステップワイズ法)を行った(Table 5下段)。重回帰係数 R は.55であり、有意であった($F(4, 59) = 6.41, p < .001$)。内在化された同性愛嫌悪とアイデンティティの不確実性とアイデンティティの中心性の標準偏回帰係数 β が有意であった。内在化された同性愛嫌悪の β は-0.28であり、内在化された同性愛嫌悪とカミングアウト行動意図には弱い負の関連がある。アイデンティティの不確実性の β は+0.22であり、カミングアウト行動意図とアイデンティティの不確実性には弱い負の関連がある。また、アイデンティティの中心性の β は+0.37であり、カミングアウト行動意図とアイデンティティの中心性には弱い正の関連がある。

考 察

カミングアウトとカミングアウトへの態度の関連 カミングアウト遂行とカミングアウト遂行能力は、それぞれ「人間関係親密希望」と弱い正の関連があった(Table 4)。このことから、ありのままの自分をみてもらいたい、ありのままの自分を知ってもらいよりよい人間関係を築きたいと思うことが、カミングアウトに繋がっていると考えられる。カミングアウトは、人間関係をより円滑にする目的で行われると推測される。

また「人間関係崩壊不安」は、カミングアウト3段階のすべてと負の関連があり、特に、カミングアウト遂行能力との間に中程度の負の関連がみられた(Table 4)。このことから、人間関係の悪化を恐れることが、カミングアウトできない要因になっていることが示唆される。友人や親など周囲の人が、性的マイノリティについて否定的、または冷やかすような発言をしていた場合には、この人に話したら関係が終わってしまったり、悪化したりするかもしれないと懸念し、話すことをためらうと考えられる。また、この人になら話すことができると思えば打ち明けても、良い結果にはならない例もある。

柘植(2014)によれば、大学におけるゼミやサークルの人間関係は一般に親密であり、それゆ

えマジョリティからの反応—受容であるのか、拒否であるのか—は、その後のキャンパスライフを永久に変えてしまうものとなり、カミングアウトはあまりにもリスクが高い。仲間や家族にカミングアウトを試みる者は、今まで築きあげたその関係性を壊したり、敵意を向けられたりする深刻なリスクを抱える。

このようにカミングアウトはリスクが大きいいため、デメリットよりもメリットの方が上回った場合に、カミングアウトは遂行されるものと考えられる。

カミングアウト尺度とLGBISの関連 LGBISの「アイデンティティの中心性」とカミングアウト遂行、遂行能力、行動意図には弱い正の相関があった(Table 4)。このことから、自分のセクシュアリティが自分を構成する要素の中心に存在しており、セクシュアリティが最も大事な部分であると認識していると、カミングアウトをする傾向にあると考えられる。「アイデンティティの中心性」は、「人間関係親密希望」とも強い正の相関がみられることから、セクシュアリティが自分のアイデンティティの中心に存在している人は、その自分の中心部分をさらけ出すことで、自分のありのままを知ってもらいたいと強く望んでいると考えられる。

LGBISの「困難なプロセス」は、カミングアウト遂行、カミングアウト行動意図との間に弱い負の相関がみられた(Table 4)。このことから、自分のセクシュアリティをなかなか認めることができないと、カミングアウトという行為にはたどり着かないということが考えられる。また、「困難なプロセス」と「内在化された同性愛嫌悪」の間には弱い正の相関があることから、自分でも受け入れられない・認められないものは、他者に話すことはできないであろうと推測できる。

アイデンティティ発達とLGBISの関連 多次元アイデンティティ発達尺度とLGBIS-SWUの各因子間では、「アイデンティティ確立完了」と「困難なプロセス」の間でしか相関はみられなかったため、併存的妥当性は認められなかった。多次元アイデンティティ発達尺度は人生の将来や目的についての包括的な尺度であるため、回答者は仕事のことなどセクシュアリティ以外の面をも思い浮かべて回答したであろう。一方、LGBIS-

SWUは同(両)性愛に対するアイデンティティの側面だけを測定しているため、測定される内容に重なる部分が少なかったのではないかと推測される。

性的指向と性自認がカミングアウト遂行能力に及ぼす効果 第一に、性的指向の主効果が有意であったので、カミングアウト遂行能力は性的指向の影響を受けると考えられる (Figure 3)。「ポリセクシュアル・アセクシュアル・その他・決めたくない・回答したくない」は、ゲイとバイとの間にそれぞれ有意な差が認められた。「その他・決めたくない」と回答した人が、恋愛感情を持ち合っているかは定かではない。しかし、「ポリセクシュアル・アセクシュアル・その他・決めたくない・回答したくない」のグループが、“完全に同性を”好きになるとは認識していない・言い切れない人たちであることは確かである。このグループよりもゲイ・バイのカミングアウト遂行能力が低いことから、同性に恋愛感情を抱くという部分が、カミングアウトがしにくくなる要因なのではないかと推測される。

先行研究では、男性は女性を保護し、リードするたくましさや力強さを持つことを要求されるので、この期待からはずれる男性同性愛者(ゲイ)の方が女性同性愛者(レズビアン)に比べ否定的なイメージをもたれやすいのではないかという指摘がなされている(桐原・坂西, 2003)。そのような社会の偏見を当事者が内在化させているために、ゲイはレズビアンよりもカミングアウトが困難であると推測される。

また、6つの性的指向の中で、バイセクシュアルが極端にカミングアウト遂行能力得点が低かった。この理由の一つとして、internalized biphobia、つまり内在化された両性愛嫌悪の影響があると考えられる。この両性愛嫌悪は同性愛嫌悪とは違った性質をもつとされている。Firestein (1996) は、社会の偏見によって、バイセクシュアルの人々は、存在を否定されることがあると述べている。バイセクシュアルは頻繁に、ヘテロセクシュアルとゲイ・レズビアン両方から自分の性的指向の開示の時に否定的な扱いを受ける。レズビアン・ゲイのコミュニティとヘテロセクシュアルのコミュニティの両方において、バイセクシュアルは詐称者、部外者というような感情を味わう。本研

究での、バイセクシュアルのカミングアウト遂行能力得点の低さも、このような社会的偏見に影響された、内在化された両性愛嫌悪がカミングアウトをすることを躊躇させていることを示唆する。

第二に、性自認の主効果が有意であったので、カミングアウト遂行能力は、性自認が身体的性別と一致しているかどうかによって影響を受けると考えられる (Figure 4)。また、シスジェンダーとXジェンダーとの間で有意な差がみられた。Xジェンダーは、比較的新しい概念であるため、周囲がステレオタイプなイメージを浮かべにくい。そのために、偏見も少なく、カミングアウトもしやすいのではないだろうか。

性自認が人間関係崩壊不安に及ぼす影響 性自認の主効果が有意であったので、人間関係崩壊不安は、性自認が身体的性別と一致しているかによって差があると考えられる。本研究では、トランスジェンダーとXジェンダーの間に有意な差が認められた。トランスジェンダーは、からだの性ところの性が一致していない感覚(性別違和)を持っている人を指すが、生まれ持った性別と反対の性別で生活を送っている人が多い。トランスジェンダーの人の中には、DSM-5の「性別違和」の診断を受け、身体的性別特徴をこころの性別に一致させる性別適合手術を受ける人もいる。自分のありたい性別で社会生活を送ってきた人にとって、カミングアウトをすることで相手が驚き、人間関係が壊れることは大きな脅威となるだろう。DSM-5には、「性別違和」の診断基準として、「その人が体験し、または表出するジェンダーと、第一次および/または第二次性徴(または若年青年においては予想される第二次性徴)との間の著しい不一致」「その状態は臨床的に意味のある苦痛、または、社会、職業または他の重要な領域における機能の障害と関連している。」という項目があるように(American Psychiatric Association, 2014)、自分の生まれ持った性別に耐えられないほどの苦痛を感じる人が多い。カミングアウトをすることで、自分が違和感のあった性別について触れられ、ネガティブな言動をされるのは、大変苦痛な体験だろう。

カミングアウトの3段階への影響要因

(1) カミングアウト遂行・遂行能力への影響要因
重回帰分析の結果、カミングアウト遂行能力と

遂行へは、内在化された同性愛嫌悪が負の影響、アイデンティティの中心性が弱い正の影響を及ぼしていた (Table 5)。

Troiden (1989) は、アイデンティティ発達モデルの最終段階〈コミットメント〉において、「この時期の同性愛者は、彼らの同性愛の現実について公共の場に発信したくなり、特別な貢献が同性愛者によってされる。彼らのゴールは、教育的な政治的な変化を通して抑圧を取り除くことである」「継続した同性愛者としてのアイデンティティへの関与と役割が、一つの生き方としての同性愛者のアイデンティティへの関与を強め、非同性愛者への同性愛者のアイデンティティをうちあげたいという欲求を高める」と述べている。この、同性愛者であることへの関与、すなわち自分の生き方には、同性愛者であることが大事な一部、なくてはならない部分であると認め誇りをもつことが、カミングアウトに強い影響を与えているということを描いている。このことはつまり、同性愛者としてのアイデンティティが自分の中心にあるとカミングアウトをするということであり、本研究の結果と一致する。

また、内在化された同性愛嫌悪についても Troiden (1989) は、「同性愛者を取り巻くスティグマによって青年たち世代の友達や友達と共に、青年が出現した性的な欲望や行動を議論することをやめようとする」と述べている。Herek, Gillis, & Cogan (2009) は、「異性愛主義は、社会の中で多くを占めており、誰もが異性愛者であると仮定されている。性的マイノリティは社会によって、見えない・知られていないものになっている。また異性愛は、社会の中で典型的なものであり、性的なマイノリティを中傷する宗教的教義や結婚の禁止なども異性愛主義に含まれている。これらのようなことが、性的マイノリティの当事者自身の中で、同性愛の欲望を心に抱くことに対して否定的な態度にさせる」とも付け加えている。このように、性的マイノリティは、社会の異性愛主義の影響を受け、自分の中にも同性愛嫌悪を内在化させていく。Cass (1979) や Troiden (1989) のモデルの3段落まで、この内在化された同性愛嫌悪がみられ、この段階では、まだ、同性愛者としての自己受容は完了されていない。また、Cass (1979) と Troiden (1989) は両者ともに、この内在化され

た同性愛嫌悪によって、人に自分が同性愛者だと打ち明けること、すなわちカミングアウトすることをためらうと主張している。

以上のことから、内在化されたスティグマとカミングアウトとの負の関連は妥当だと考えられる。ここでいうスティグマとは、世間が同性愛を嫌悪し負のレッテルを貼っていることを指し、内在化されたスティグマとは、LGB当事者が世間と同じように、自分たちの中に同性愛に対する嫌悪感情を持っている状態である。よって、自分たちの同性愛は世間から忌避されるものだろうと懸念し、カミングアウトをためらう状態になることが示唆される。従って、アイデンティティの中心性があり、内在化された同性愛嫌悪がない状態が、カミングアウトを「している」「できる」状態であると考えられる。すなわち、自分の同性愛的なアイデンティティを自分の中心で欠かせない部分であると考えることができ、アイデンティティを快い状態と思える、自己受容している状態がカミングアウトできる状態であると推測できるため、仮説1は支持されたと考えられる。

(2) カミングアウト行動意図への影響要因

カミングアウト行動意図については、内在化された同性愛嫌悪と弱い負の関連が、アイデンティティの中心性と弱い正の関連がみられた点では遂行と遂行能力と同じだが、それに加えてアイデンティティの不確実性と弱い正の関連がみられた点でカミングアウト遂行・遂行能力と異なる (Table 4)。本研究では、「アイデンティティの不確実性」に、Mohr & Kendra (2011) のLGBISで「アイデンティティの優越性」に入っていた「LGBの人々が異性愛者よりも優れていると感じる」という項目と、「自分の性的指向について繰り返し考えを変える」「自分の性的指向について答えを出そうとするととても混乱してくる」「自分の性的指向がどのようなものなのか、完全に確信しているわけではない」という項目が含まれている。これらの項目内容からは、まだ同性愛者のアイデンティティとしては不確実な部分があるが、完全に同性愛については否定的ではなく、考え続けている状態であると推測される。すなわち、「するつもり」は、今は「している」「できる」状態にはないが、性的指向についてのアイデンティティが固まればカミングアウトをしようと計画してい

るという状態なのではないだろうか。また、カミングアウト行動意図と「アイデンティティの確立途中」との間に弱い正の相関がみられたことから、アイデンティティがまだ確立されていないために、カミングアウトをまだしていないものと推測される。従って、仮説2は支持されたと考えられる。

今後の課題 今後、性的マイノリティの自己受容を検討していく際には、シスジェンダー・トランスジェンダー・Xジェンダーなどの性自認の一致について聞くだけではなく、調査対象者が自身をどの性別である（性別がわからない・ない・決めたくない）と認識しているかについて聞くことが望まれる。それによって、バイセクシュアルやパンセクシュアルについてなど、今回、回答者の性別が不明であったセクシュアリティのより精緻な検討が可能になるだろう。

また、レズビアン・ゲイ・バイセクシュアルの対象者は66名であり、十分な人数とは言えない。当事者研究であるためやむを得ない面もあるが、今後、より多くのサンプル数でLGBIS-SWUについて知見を積み重ねていく必要がある。

謝 辞

質問紙の配布、回収、郵送を引き受けてくださった、性的マイノリティ当事者サークルの代表様方・サークルの皆様方、お忙しい中ご協力いただきましたこと深くお礼申し上げます。

引用文献

- American Psychiatric Association (2014). DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引 医学書院
- Booker, C., Riegger, G., & Unger, J.B. (2017). Sexual orientation health inequality: Evidence from Understanding Society, the UK Longitudinal Household Study. *Preventive Medicine, 101*, 126-132.
- Brown, M., & Amoroso, D. M. (1975). Attitudes toward Homosexuality among West Indian male and female college students. *Journal of Social Psychology, 10*, 457-467.
- Cass, C. (1979). Homosexual Identity Formation: A

Theoretical Model. *Journal Homosexuality, 4*, 219-235.

Cass, C. (1984). Homosexual Identity Formation: Testing a Theoretical Model. *The Journal of Sex Research, 20*, 143-167.

針間克巳 (2014). セクシュアリティの概念 針間克巳・平田俊明(編) セクシュアル・マイノリティへの心理支援—同性愛、性同一性障害を理解する— 岩崎学術出版社

Herek, G. M., Gillis, J. R., & Cogan, J. C. (2009). Internalized stigma among sexual minority adults: Insights from a social psychological perspective. *Journal of Counseling Psychology, 56*, 32-43.

日高庸晴 (2008). MSM (Men who have sex with Men) の HIV 感染リスク行動の心理・社会的要因に関する行動的疫学研究 日本エイズ学会誌, *10*, 175-183.

日高庸晴・木村晴和・市川誠一 (2007). 厚生労働省エイズ対策研究推進事業 ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート2 (厚生労働省エイズ対策研究事業) 「男性同性間の HIV 感染対策とその評価に関する研究」 成果報告

平田俊明 (2014). 精神医学と同性愛 針間克巳・平田俊明(編) セクシュアル・マイノリティへの心理的支援 岩崎学術出版社

今林俊一 (1992). 青年期における孤独感と自己受容に関する研究 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編, *44*, 257-272.

石丸径一郎 (2004). 性的マイノリティにおける自尊心維持—他者からの受容感という観点から— 心理学研究, *75*, 191-198.

伊藤裕子・加藤悠二・堀江有里・東 優子・湯川隆子・松並知子 (2018). 研究委員会企画シンポジウム3 今、教育現場でLGBTの子ともたちは 教育心理学年報, *57*, 291-301.

桐原奈津・坂西友秀 (2003). セクシャル・マイノリティに対するセクシャル・マジョリティの態度とカミング・アウトへの反応 埼玉大学紀要, *52*, 55-80.

Meyer, I.H. (2003). Prejudice, Social Process, and Mental Health in Lesbian, Gay, and Bisexual Populations: Conceptual issues and Research Evidence. *Psychological Bulletin, 129*, 674-697.

- 三成美保(編)(2017). 教育とLGBTIをつなぐ 学校・大学の現場から考える 青弓社
- 宮沢秀次(1987). 青年期の自己受容性の研究 青年心理学研究, 1, 2-16.
- Mohr, J. J., & Kendra, M. S. (2011). Revision and Extension of a Multidimensional Measure of Sexual Minority Identity: The Lesbian, Gay, and Bisexual Identity Scale. *Journal of Counseling Psychology*, 58, 234-245.
- 中間玲子・杉村和美・畑野 快・溝上慎一・都筑学(2014). 多次元アイデンティティ発達尺度(中塚幹也(2010). 学校保健における性同一性障害: 学校と医療との連携 日本医事新報, 4521, 60-64. DIDS)によるアイデンティティ発達の検討と類型化の試み 心理学研究, 85, 549-559.
- Rogers, C. R. (1947). Some observations on the organization of personality. *American Psychologist*, 2, 358-368. 伊藤 博(編訳) ロジャーズ全集第8巻 パースナリティ理論 岩崎学術出版社
- Morin, S. F., & Garfinkel, E. M. (1978). Male homophobia. *Journal of Social Issues*, 34, 29-47.
- 角野善司(1994). 人生に対する満足尺度(the Satisfaction With Life Scale [SWLS]) 日本版作成の試み. 日本教育心理学会第36回大会発表論文集, 192.
- Tamagawa, M. (2018). Coming Out to Parents in Japan: A Sociocultural Analysis of Lived Experiences. *Sexuality & Culture*, 22, 497-520.
- Troiden, R. R. (1979). Becoming Homosexual: A Model of Gay Identity Acquisition. *Psychiatry*, 42, 362-373.
- Troiden, R. R. (1989). The formation of homosexual identities. *Journal of Homosexuality*, 17, 43-73.
- 柘植道子(2014). セクシュアル・マイノリティ大学生を支える学生相談 針間克巳・平田俊明(編) セクシュアル・マイノリティへの心理支援—同性愛, 性同一性障害を理解する— 岩崎学術出版社
- 和田 実(1993). 同性友人関係: その性および性役割タイプによる差異 社会心理学研究, 8, 67-75.
- 薬師実芳・笹原千奈未・古堂達也・小川奈津己(2014). LGBTってなんだろう?—からだの性・こころの性・好きになる性 合同出版

たなか みどり (NPO法人いっと)
いまじょう しゅうぞう (昭和女子大学大学院生活機構研究科)